

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)329915367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■巻頭言■

ハイネとマルクス・エンゲルス

滝野 忠：2

時代を変える

竹中平蔵の

山下 俊幸：3

ベーシックインカム論と新社会党

ヨーゼフ・ディーツゲンに関連して

中澤 秀行：7

―独学で哲学を学び唯物弁証法を発見した―ドイツ人労働者(1)―

ソ連等の変質・崩壊の根本原因

原野人：9

― 小山・上野論争に寄せて(9)―

読者からのおたより

..... 11

旬刊社会通信

NO.1328

二〇二一年一月一五号

二〇二一年一月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

ハイネとマルクス・エンゲルス

時代を変えろ

18〜19世紀はブルジョア革命の時代、ギロチンが大活躍した時代でもありました。革命の息子たちは革命の英雄たちだけではありません。音楽、哲学そして文学に。文学界ではシラー、ハイネがいます。気難しいゲーテ大先生、ブルジョア社会を細密画のように描き出したバルザックもいます。

ぼくはハイネが好きです。愛の詩人といわれるハイネですが、ヘーゲルを理解し、ローマ法の本質を見抜き、ドイツの古典哲学の革命性をだれよりも早く見抜いた愛国者、民族主義者、革命的民主主義者がハイネです。世界資本主義の背景でマグマのようにフツフツと湧き上がる矛盾、その矛盾を認識できずコロナに翻弄（ほんろう）される労働者階級、歴史を切り拓くため、ハイネの詩（うた）を紹介します。

くらい眼（まなこ）に涙もみせず

機にすわって歯を食いしばる

ドイツよ おまえの経帷子（きようかたびら）を織ってやる

三重の呪いを織りこんでー

織ってやる 織ってやる

一つの呪いは 神にやる

一つの呪いは 王にやる 金持ちどもの王にやる

一つの呪いは いつわりの祖国にやる

梭（ひ）は飛び 機台はうなる

日も夜もやまず織るー

古いドイツよ おまえの経帷子をおってやる

三重の呪いを織りこんで

織ってやる 織ってやる！

この詩はハイネが1844年7月、ドイツのシエレージエンでおこった亜麻布の職工の暴動を謳ったのです。ハイネがマルクスと知り合った1844年以降につくられたとされる十一篇中の一作です。ハイネは己の政治的社会的立場をなんと高らかに謳い上げていることでしょうか。

知識人が進むべき生活方向をはっきり指し示し、思索や学問は行動のため、実践のためにのみ存在することを主張しています。

マルクスとハイネが知り合ったのはパリ、マルクス夫妻はドイツを追われ1843年10月パリに亡命、ハイネはドイツの反動政治に抗し革命のパリにいたのです。マルクスとハイネの交友は、マルクスがパリを追われ、ハイネが望郷の念にかられてドイツに戻った1844年夏まで続けられたのです。

ハイネは、詩人であるばかりか、軽妙、皮肉屋、からかい上手の哲学者でもありました。詩作は『ハイネ新詩集』『歌の本』『冬物語』、読み物に『流刑の神々・精霊物語』、哲学書に『ドイツ古典哲学の本質』（いずれも岩波文庫）があります。ハイネがマルクスとエンゲルスとどれほど親しく、新しい社会をめざす同志であったかは、エンゲルスがハイネの『古典哲学……』の「ドイツはカントによって哲学革命の道ですすむことになった。哲学はドイツ国民ぜんたいの問題となった。」（185頁）「わがドイツの哲学革命はおわった。ヘーゲルがこの革命の大きな循環を終結させた。それ以降はただ、自然哲学の学説が発展し完成を見るのみである」（235頁）を高く評価し、『フォイエルバッハ論』で、ハイネがドイツ哲学「ヘーゲルの背後に革命」を発見したことをたたえています。（全集21、269頁）。

マルクスは『資本論』（第七篇第22章第5節の脚注65）で、アホウな経済学者にマルサス、ジヨームズ・ミル、マカロックを上げ、「もしわたしにわが友ハイネの勇気があつたなら、わたしはジェレミー・ベンサムをブルジョアの愚鈍の天才とよんだことであろう」と書いています。

マルクスとエンゲルス、そしてハイネの信頼のほどがわかります。

コロナ感染拡大は「まったく世は逆さま」であることをあらためて教えました。戦後、公衆衛生の充実求めた憲法25条2項を瞬く間に打ち壊し、食品・医薬品等営利企業や営利医療を育て、感染症への備えを奪いとり、保健所集団健診を委託健診へ、所長・予防課長・結核課長・母子係長・医事・薬事の医師らの席を奪い、保健師も激減させた。

コロナは感染症、接触・飛沫が感染の原因です。少なくとも今の予防策は移動の制限と禁止です。また、権力者たちは人間が頭で歩いているかのように、「予防より経済だ」とGOTOへヒタ走り、感染をふくらませてしまいました。こんな世の中の大元を考え、究め、歴史をふりかえり、ハイネとともに進みたい。（滝野 忠）

竹中平蔵のベーシックインカム論と新社会党

独占資本の伝道師

菅政権で内閣官房参与に就任した御用学者・竹中平蔵（現東洋大学教授、慶応大学名誉教授）がこれまでの持論を基に、国民1人あたり月7万円を支給するかわり生活保護や年金などを廃止する「ベーシックインカム」を提言した。「ベーシックインカム」とは、「全ての人に無条件給付」が原則であるらしいが、竹中は「高所得者には年末調整や確定申告の時に返してもらおう」という。

元日経新聞社員の佐々木実氏（ジャーナリスト）は「竹中平蔵型ベーシックインカムは、いわば新自由主義の終着駅なのであり、全ての社会制度を新自由主義の考えに基づいてつくりかえてしまうことが真の狙いだ。……『ベーシックインカムは究極のセーフティネット』と著書で述べているが、騙されてはいけない」「竹中平蔵型ベーシックインカムは想像を絶する超格差社会への扉を開く毘に他ならない」と厳しく

批判し(2020・10・23、週刊金曜日)。自身の著書でも「日本で一番危険な男」と描いている。

また、田原総一郎氏(ジャーナリスト)も週刊朝日(2020・12・2)で、「竹中平蔵に大批判 その異常さを日本は許容できない」と。

更に、藤原正彦氏(東大卒の作家・新田次郎の次男)は「国家観なき菅総理の『亡国改革至上主義』(文藝春秋)で「小泉内閣から安倍内閣に至る20年間にわたり政権の中核にいて、ありとあらゆる巧言と二枚舌を酷使し、新自由主義の伝道師としてミスリードし日本の富をアメリカに貢いできた。学者でも、政治家でも、実業家でもない疑惑の人物、竹中平蔵を任用した」と手厳しい批判をしている。

履歴

竹中平蔵とはどういう人物か?『ウィキペディア』によると、1951年生まれの日本の実業家、政治活動家、経済学者と紹介している。これまでの竹中の政府との関わり、言動などを振り返ってみる。

・1998年7月小渕内閣の経済戦略会議(議長・アサヒビールの樋口廣太郎)の委員にそろりと就任し、議長代理の中谷巖(現・一橋大学名誉教授)を中心とした学者グループの一員として戦略会議の支柱を形成した。

・森内閣の発足により設置されたIT戦略会議委員。

・2001年第一次小泉内閣で経済財政政策担当大臣、IT担当大臣。2002年の小泉第一次改造内閣で経済財政政策担当大臣留任し金融担当大臣も兼任。第二次改造内閣でも留任し、内閣府特命担当大臣として、金融・経済財政政策を担当。2004年参議院議員となり、9月小泉内閣の経済閣僚として郵政民営化担当大臣に就任。

日本経済の「聖域なき構造改革」の断行を表明。2005年10月総務大臣兼郵政民営化担当大臣に就任。2006年議員辞職。小泉政権後、慶応大学教授に復帰。

2012年9月には日本維新の会の衆議院選挙の候補者選定にも供される。

・安倍内閣では、「産業競争力会議」のメンバー、内閣府の「国家戦略特区」の特区諮問会議メンバーに就任。

最大の「功績」は、小泉政権下の郵政の民営化、安倍政権における「獣医学部」の新規参入問題にも関与した、と言われている。

参考までに、竹中らと共に新自由主義者として構造改革推進、規制緩和に大きな影響力をもっていた中谷巖(一橋大学名誉教授)は2008年の著書『資本主義はなぜ自壊したのか』で、新自由主義、市場原理主義、グローバル資本主義との決別を表明し、「小泉改革の大罪と日本の不幸 格差社会、無差別殺人―全ての元凶は『市場原理』だ」(『週刊現代』2001・1・3、2008・12・15)で、「過去の言動」を自己批判、180度転換を宣言し、小泉純一郎、竹中平蔵らが実行した「聖域なき構造改革」を批判している。

労働者に敵対

竹中の言動は、特に労働問題にしつこく発言している。

① 1985年、通訳など専門13業種に限定した「労働者派遣法」が成立した。1996年に26業種に拡大。1999年原則自由化。2003年製造業にまで拡大。竹中はこれらの功績でいつの間にか、人材派遣会社最大手「パソナグループ」の取締役長に就任。週刊誌の報道によると、年俸1億2000万円とも伝えられている。

② 非正規労働者が増えていることについて、竹中は「問題は今の正規雇用に関して、経営側に厳しすぎる解雇制約があることだ」、社員が法律によって過剰に保護されている。非正規社員が増えているのは1979年の最高裁判例で整理解雇の4要件が示されたことが原因。「解雇できる新たな法律を制定することが必要だ」、

これらの言動は最高裁判例の「整理解雇の4要件」を意識したものだ。整理解雇の4要件とは、・人員整理の必要性・解雇回避努力義務の履行・非解雇者選定の公平などの合理性・労働組合などとの誠実協議など手続きの妥当性の4項目。

③ 2015・1・17のテレビ朝日の「朝まで生テレビ」に出演し、「正社員をなくせばいい」と発言。同番組の2020・10・30には、格差問題に関連して、「正規雇用と言われるものはほとんど首にできない。それで非正規雇用を増やさざるを得なかった」「首を切れない社員なんて雇えないですよ」などと発言。

④ 「若い人」に1つだけ言いたいのは、皆さんには貧しくなる自由がある。何もしたくないなら、何もしなくて結構。その代わりに貧しくなるので、貧しさをエンジヨイしたらいい。ただ1つだけ、その時に頑張つて成功した人の足を引っ張るな」

⑤ 2018・6・21の東京新聞のインタビュで、「時間内に仕事を終えられない、生産性の低い人に残業代という補助金を出すのはおかしい」と述べ、「残業ゼロ制度（高度プロフェッショナル制度）」の導入を進言。

⑥ 著書『経済学は役に立ちますか？』（2018年東京書籍発行）では「すべて給付型の奨学金にすれば大学生はますます勉強しなくなる。つまり、極端な言い方をすれば、ただでお金をもらうわけですから勉強する必要が低下するという逆のインセンティブを与えるような気がします」と。

⑦ 竹中は「パソナ」の他に、オリックス、SBIホールディングスの社外取締役などを兼務し、その年収は計り知れない。億万長者になった。派遣労働者から強奪し「改革利権」「究極の天下り」「学商の独り勝ち」と言われる所以だろう。

竹中平蔵が主張するベーシックインカムについて、佐々木実氏ばかりか、中央公論で連合会長の神津里季生でさえも、また中島岳志氏（東京工大教授）が新自由主義者だと批判している。日本で新自由主義、規制緩和が与野党問わず大合唱した時期があった。中曽根、サッチャー、レーガンの時代だ。現在は新自由主義にたいする批判が強まっているが、竹中平蔵は、新自由主義の元祖、ハイエクやフリードマンを信奉する今や稀な学者（？）である。ベーシックインカムについては自民党の補完政党である日本維新の会、中道右派の国民民主党などが導入を求めている。

竹中と加藤さん

竹中平蔵が主張するベーシックインカム論について、新社会党も素早く反応した。新社会党の機関紙『新社会』（2020・11・17）によると、「壊憲NO！96条改悪 反対連絡会」主催の「コロナ禍の雇用破壊・生活破壊を許すな！10・28労働者集会」で加藤晋介弁護士（党副委員長・政策委員長）は講演で、「菅政権下における『成長戦略』と竹中平蔵の新自由主義的なベーシックインカム論は社会保障制度の完全破壊を目論み、我々の考えるベーシック・サービス（生活保護や年金等にプラス）とは真逆な政策だ。」と批判している。

思い起こせば、『新社会』（2017・6・20）の特集で新社会党は『21世紀の「中期政策」』今なぜ「補補強」か（下）で、小見出し「普遍主義の確立を」のなかで「生存権は、年金制度が破綻状況にあるのだから、働かなくても一定の給付があるベーシックインカムを導入する。生活保護も年金も児童手当も一本化し、財源も税金と社会保障を一元化する。そして、金持ちにも貧乏人も分け隔てなく月10万円程度の金を払う。その代わりそれを超える収入があれば累進課税で取り上げる」と解説している。金額こそ違いますが、その主張は同じではないだろうか。

ここで加藤氏が講演で述べた「我々の考えるベーシック・サービス（生活保護や年金等にプラス）」と、『新社会』（2017・6・20）の特集の解説にある「生活保護も年金も児童手当も一本化し、財源も税金と社会保障を一元化する」と同一なのか。また、これまで「ベーシックインカム」（普遍主義）と言っていたものが、突如「ベーシック・サービス」（生活保護や年金等にプラス）と変えた理由や根拠がわからない。これまで『社会通信』に掲載されている原野人氏の論稿にあるように、竹中平蔵の新自由主義的なベーシックインカム論と加藤氏のベーシックインカム論は同一のものか。どう受け止めるべきなのか？

『新社会』の読者は、必ずしも理論的研究者ばかりではない。私のように社会主義政党としての新社会党を信頼し支持し期待している、いわゆるごく一般的労働者が大勢いる。従って、読者に誤解を与えるようなことがあってはならない。

階級協調の政策

ベーシックインカムと社会主義との関係について、『新社会』特集号では、「資本主義を廃絶する第一歩だ。資本主義を廃絶するには賃労働を廃絶する」と解説されているが、科学的社会主義の党として理論的根拠が未だに理解できないのは私だけだろうか。社会主義政党である新社会党が竹中平蔵などと同じような政策を掲げても力にはならないし利用されるだけである。

ベーシックインカムは、与野党問わず大合唱が始まることは間違いない。新社会党はいち早くベーシックインカムの議論と決別し、地道に地方から党友・支持者・議員を増やす方に舵を切ってほしいと願うのは私だけではない。

（2020・12・21記）

（山下 俊幸）

ヨーゼフ・デイツゲンに関連して

— 独学で哲学を学び唯物弁証法を発見した一ドイツ人労働者 (1) —

(一) 『フォイエルバッハ論』で紹介されたデイツゲン

『フォイエルバッハ論』の第四章(岩波文庫には訳者による「弁証法的唯物論と史的唯物論」という題がついています。)には、次のような下りがあります。

「この唯物論的な弁証法は長年われわれの最良の道具でありもつとも鋭利な武器であったが、それを発見したのはわれわれだけではなく、そのほかになお、われわれとは独立に、またヘーゲルとさえ独立に、一人のドイツの労働者、ヨーゼフ・デイツゲン (Joseph Dietzen、一八二八〜一八八八) がそれを再び発見したのは注目すべきことである。」(岩波文庫62頁)、と。続く(注一)には、『ある手工業者の見た頭脳労働の本質』、ハンブルク、マイスナー書店、を見よ。「エンゲルスの注」とあります。

この個所は、『フォイエルバッハ論』に初めて目を通した時に、大いに気になったものです。唯物論的弁証法を、マルクスやエンゲルスとは独立に発見したドイツ人がいたというのです。且つ、その人デイツゲンは、一労働者だということですから、興味をわきましたし、なんとなしに励みさえも感じたものです。

(二) マルクス宛てのデイツゲンの手紙

『カール・マルクス他十八編』(岩波文庫)には、レーニンによるマルクス、エンゲルスを理解するための「必読の文献」が収録されていると思います。この文献中に、「マルクスのクーゲルマンへの手紙のロシア語訳序文」というのがあります。これを読むと、マルクスがクーゲルマンに宛てた手紙(計五十九通が収録)には、マルクス、エンゲルスの著作を正しく理解するための手引き、示唆というものが、多数含まれています。

そんな訳で、次にデイツゲンが気になったのは、五十九通が収録されている国民文庫の『クーゲルマンへの手紙』に目を通した時です。

一八六七年十二月七日付の手紙には、「ドイツ生まれのロシアの一労働者(皮なめし工)からの手紙を同封しておく(どうか返送してください)。まったくエンゲルスの言うとおり、この皮なめし工と、かの靴屋ヤコブ・ベームをくらべてみると、労働者自身の思索にかかる哲学は一大進歩をとげている。エンゲルスはまた、『ドイツ人』労働者でなければこのような頭脳の産物をうむことはできないと言っているが、そのとおりだ。」(国民文庫63頁)、という一節があります。加えて、「(どうか返送してください)」と記されている、デイツゲンがマルクスに宛てた手紙(一八六七年十月二十四日、十一月七日付け)の全文が掲載されています。

このマルクス宛の手紙には、マルクスの歴史学研究の導きの糸、唯物史観の公式を述べた序文を持つ『経済学批判』についての、デイツゲンの感想も述べられています。その一節には次のようにあります。

「かつて私はベルリンで出版された『経済学批判』第一分冊を熱心に勉強しました。

そして、このような小冊子でありながら浩瀚な書物もおよばないような新しい積極的な知識と観念をあたえてくれた書物は他になかったことを告白いたします。それで本書の続刊をまちわびていました。先生がはじめて明瞭な、異論の余地のない、科学的な形式で歴史的発展の意識された傾向、すなわち今日までは盲目的な自然力にほかならなかつた社会的生産過程を今後は人間の意識に従属させることを説かれました。この傾向を認識させたこと、われわれの生産は無思慮なものであるという認識をあたえたことは、先生の不滅の功績です。この点における真価は年とともに一般にみとめられるようになるでしょう。きつとみとめられるにちがいありません。先生の基礎的な経済学の前提には基礎的な哲学があることを、貴著の行間から読みとりました。」(国民文庫64頁)、と。

『経済学批判』を正しく評価していると思いますが、これに続く一節では、「私は哲学にはずいぶんと努力してまいりましたので、私の科学的研究の簡単な報告をさせていただきますたいという願いを禁じることができません。もとより私が初等教育しか受けていない一介の皮なめし工にすぎないことは、ご承知おきください。」と前置きし、ディーツゲンが研究してきた哲学の科学的研究の内容が披露されます。

そして手紙の最後は、自身の一書をあらわしたいと述べた後、次のように締めくくられます。

「私は一手工労働者の哲学が概して今日の教授哲学よりも明晰であることを立証して、先生によるこんでいたきたいと思いました。さいわいにして先生におみとめいただけるならば、どのアカデミーによって会員に指名されるよりもはるかに光栄に存じます。

最後にいまいちどくりかえして確言いたしますが、今日のわれわれの時代をはるかに抜きんでられた先生のご努力にたいしては深甚な関心をいだいているしだいです。社会の発展、労働者階級の支配のための闘争は、わがことのようにいきいきと私の心をそそります。ただ私はもつと活発にそれに協力できないのが残念です。ゆけ、子らよ、祖国のために！」(国民文庫67頁)、と。

このように、マルクスもエンゲルスもディーツゲンを高く評価しています。しかし、マルクスは、一八六八年十二月五日付けのクーゲルマンへ宛てた手紙のなかで、次のようにも記しています。

「ディーツゲンの住所がわかっていますか？ かなりまえのことだか、彼は『思惟能力』にかんする草稿の断片をおくってきたことがある。それは多少の混乱やおびただしい重複があるにしても、すぐれた点がたくさんあり、一労働者の独力の所産としては一驚歎にあたいするものさえふくんでいる。私はエンゲルスの意見もききたかったので、読みおわつてもすぐには返事を出さなかつた。そして、草稿をエンゲルスにおくった。草稿がおくりかえされるまでずいぶんかかった。」(国民文庫95頁)、と。

この手紙を読むと、まずもって第一に注目すべきは、ディーツゲンの『思惟能力』にかんする草稿」を、「多少の混乱やおびただしい重複があるにしても」、「すぐれた

点がたくさんあり、「驚嘆にあたいするものさえふくんでいる」、と言っていること
であります。すなわち、ディーツゲンには「多少の混乱」があり、満点という訳には
行かないというのです。

第二には、こうした時、マルクスは「エンゲルスの意見をきく」ことにしていたと
いうことです。マルクスとエンゲルスは、膨大な往復書簡を残しましたが、常に意見
交換を続けています。

(三)『資本論』に登場するディーツゲン

『資本論』第一巻の刊行は1867年であります。そして第二版は1873年に刊
行されます。

マルクスは「第二版の後書」では、第一章第三節(価値形態)は全部書き改めたと
述べ、第一章第四節の大部分も書き改めたと言うように、改訂した箇所の指摘に始ま
り、『資本論』を理解するに当たつての重要な示唆、初版に対する世間の評価の紹介
と、それに対する『資本論』の土台となっているマルクスの唯物弁証法なり唯物史観
に対する積極的な説明、等々が展開されています。このなかで、ディーツゲンについ
ても次のように述べています。

「ドイツのブルジョア階級の博学な代表者たちと博学でない代弁者たちは、私の以
前の諸著についてやりとげたと同じように、『資本論』をまず黙殺しようと試みた。
この戦術がもはや時勢に向かないようになったと見るや、彼らは、私のこの書を批判
するという口実で、『ブルジョアの意識を鎮静させるために』処分を書いた。だが、
労働者新聞紙上には――例えば『人民国家(フォルクスシュタート)』紙上のヨーゼ
フ・ディーツゲンの諸論文をみよ――傑れた戦士を見出した。彼らはこの人々にたい
して、今日までまだ回答を与えていない。」(『資本論』岩波文庫第一分冊25頁)、
と。

マルクスは、『経済学批判』同様に『資本論』も黙殺されようとしているなかで、
ディーツゲンのような傑出した読者を持つことができたことに、喜びを感じていま
した。マルクスは常に、最善の理論的作物を労働者に提供したいと考えていました。

2020年11月21日

(信州松本 一労働者にして年金生活者 中澤秀行、つづく)

ソ連等の変質・崩壊の根本原因

Ⅰ 小山・上野論争に寄せて(9)Ⅰ

ソ連の変質・崩壊や中国の変質の原因を正しく見ない小ブルジョアインテリは、国
有化こそが間違いであり、国家権力の労働者階級による奪取など無用だとする。

小ブルジョアインテリには、ソ連や中国ではなぜ労働者階級の国家権力から大きく
変質していったのかの根本原因を見ることができない。真理は繰り返し返すべしという格
言により、マルクス、エンゲルス、レーニンによってその根本原因を確認しよう。

パリ・コミューンとマルクス・エンゲルス

マルクスの『フランスの内乱』を解説したエンゲルスの序文によれば、「国家と国家機関とが社会の従僕（召使）から社会の主人へ転化（変化）するのは、これまでの国家でも避けられないことであつたが、コミューンは、そうならせないために二つの確実な（まちがいのない）手段を用いた。」（ME全集 第22巻204頁、新潮社版選集 第10巻111頁、括弧内は選集から）

ところがマルクスとエンゲルスがパリ・コミューンから汲み取った「二つのまちがいのない手段」が、レーニン亡き後のソ連等ではおろそかにされてしまったのである。

国家は階級支配の機関である。労働者階級の国家とは、労働者階級が生産手段を社会的所有に変革し管理しつつ、旧資本家階級や小経営者等を支配・教育して、階級のない社会へと導く国家である。国家の運営に当たるものはあくまでも労働者階級の代理人であり、従僕でなくてはならない。ところが主従逆転して、これが労働者を支配する主人になってしまふのは致命的な変質である。国家は階級支配の機関としての性格上、諸条件によつて死滅への期間が長引くほど、このような変質を生じやすい。それを避けるためには「まちがいのない手段」をとることが必要不可欠なのである。

ロシア革命に際しては、先進資本主義諸国が次々と同時に革命を実現することができなかつたために、マルクスやエンゲルスが考えたようには国家も、階級も短期間になくすることができなかつた。ドイツ革命の失敗を始めとする国際的・国内的諸条件によつて、ソ連の国家が長く存続することになつたのはやむをえないことであつた。

しかしそれだけにマルクスとエンゲルスがパリ・コミューンから学び取り、レーニンが『国家と革命』で整理した労働者階級国家の次のような原則を尊重し実施することが根本的に重要だつたのである。

レーニンが重視した三原則

「彼らが官僚に転化するのをふせぐために、マルクスとエンゲルスのくわしく考究した方策が即時にとられるであろう。すなわち（一）選挙制だけでなく、随時の解任制、（二）労働者なみの賃金をこえない俸給、（三）すべての人が統制と監督の職務を遂行し、すべての人がある期間『官僚』になり、したがつて、だれも『官僚』になれない状態へただちに移行すること。」（レーニン全集第25巻、521頁）

これを労働者階級の国家と国家機関の三原則といつてもよいであろう。

労働者や農民の社会の召使であるべきものが、いつのまにか彼らを支配する主人に変質してしまうのを防ぐために、レーニンがこの三原則を重視したのは当然である。

10月革命数カ月後に開かれたロシア共産党（ボルシェヴィキ党）第7回大会に向けて書かれた『綱領草案下書き』では、『ソヴェト権力についての一〇のテーゼ』の『ソヴェト権力の強化と発展』において、10のテーゼのうち実に6のテーゼは、前記の三原則を実現するための内容となっている。（全集第27巻、153～157頁）

これらが簡単に実現できたわけでない。時を同じくして執筆した『ソヴェト権力の当面の任務』（同上、241～280頁）で、レーニンは解決への方策を論述している。

レーニン後の三原則軽視

しかしこのマルクスの教訓であるプロレタリア権力の三原則の重要性を、レーニンのほかには一体何人の指導者が深く認識していたのであろうか。

レーニン後の指導者にはこの原則の追求が見られないどころか、無視・忘却された。(一)については、共産党の主要役職への人選において、たちまち指名が選挙にとつて代わってしまった。一党支配では国家機関でも同様となった。

(二)については、当面の妥協としてはブルジョア専門家の大物には非常な高給を払わざるをえないが、パリ・コミューンの原則やプロレタリア権力の原則からの後退であり、闘いの中で解消していかなばならないというレーニンの言葉も忘れ去られた。

(三)について、「ただちに」といつてみても、教育・文化水準の低いソヴェエトでは、長期にわたる闘いとなることも、レーニンは述べている。

だが期待されたスターリン後においても、教育・文化水準がいかに高くなるうとも、これらの原則が追求され、実現されることはなかった。党幹部達みずから高給をほみ、種々の特権をもつようになつてしまつては、三原則が無視され、忘れられたのも当然である。共産党一党の支配で党と国家とが一体化しては、労働者階級国家からの乖離を阻止することも、社会主義を蘇生させることもできなくなつてしまつた。

国家と国有企業がそれによつて変質していったのである。エンゲルスの言葉を借りれば、「国家と国家機関とが社会の従僕から社会の主人へ転化」していったのである。プロレタリアートの独裁から、プロレタリアートに対して新たな「主人」の如くなつた一種の特権階級の独裁へと変質していったのである。ゴルバチョフもエリツインもプーチンも今日の大資本家たちも、みなその変質の中で生まれ育つた、党と国家機関の大幹部であつた。国際的な階級闘争が激しくなつていくというのに、科学的な社会主義の思想と理論が、指導部にも、労働者の中にも希薄になつていった。

国際的な支援を含めて、軍事費の比率は大きくなり、消費財の生産は豊かにはなりえなかつた。変質した国家と企業の中では、労働者が創意性を發揮することもなくなつていった。アフガンへの派兵は特に大きな負担となつた。社会主義の蘇生よりも、反革命による崩壊のほうが当然となつてしまつた。ソ連が崩壊の危機に立つたとき、労働者階級は反撃に立ち上がるどころか、東欧諸国も含め圧倒的多数がむしる崩壊を歓迎した事実を冷徹にみるならば、根本的な原因がどこにあつたかは明らかであろう。

日本では三原則を順守できる十分な条件があることは、先の稿『ソ連や中国と日本はどう違うか』(社会通信10月15日号)で述べたとおりである。(原野人)

◇ 読者からのおたより ◇

わが町にも

原さん「どこをさまよう加藤さん」いいですね。京都の稲村さんもガンバってますね。佐久にもコロナがやってきました。浅間病院―医療センターの大きな病院から高齢者気を付けなくつちやーわれ 浅間おろしの風が北海道の風より冷たい！ (長野県佐久市 菅原須摩子)

仲間をつくる

残り少ない「現役タイム」に焦らず、しかし、確実にひとりでも多くの「仲間」をつくりたいです。今年も社会を変えるためにがんばりましょう！ (北海道斜里郡 佐竹要)

治安維持法 菅総理の学術会議攻撃は大変な行動です。見逃していたら治安維持法に成長心配があります。反対運動を続けましょう。『社会通信』を西条市議高橋章哲から受け取り中。小生毎月1回西条市内で街宣中、12月で35回目です。

(愛媛県新居浜市 真鍋知己)

資本論学習会 課題山積ですが、希望を失わず一日一日積み重ねていきます。昨年から「資本論」学習会を始めました。七十歳代の数名で月に1度十頁くらいずつ読んでいます。(水戸市 横山卓) **若いメンバーと** 『社会通信』の全体情勢や問題提起は、田舎にいる私には大変力になります。昨年はコロナ禍での自粛ムードで声を出しづらい世の中がつくられました。創意工夫して地域で若いメンバーと運動をしてきました。

(網走市 鈴木孝)

原稿書きまます 震災10年目のテーマで『通信』に載せたいと思います。(宮城県富谷市 相沢瑞男) **勉強するぞ** 何かと不安要素の多い年明けとなりました。やはり元気が一番ですね。元気の源、笑うことを絶やさず楽しい一年にしていきたい。昨年同様、何事も勉強、一生懸命を心がけて、少しでも人間的に成長したい。今年も勉強します。

(東京八王子 蓑輪泰臣)

今年の桜は？ 学術会議の6名、「俯瞰的」に切り捨て。「ふかんてき」という言葉を初めて聞きました。それも、下を向いたままの原稿読みでした。あなたには、「怖菅的」や「腐菅的」がお似合いです。税金を使って首相が主催する桜を見る会に、安倍首相の地元後援者らが多数出席。桜を囲んだサクラ、今は季節はずれの満開か。

普天間飛行場の返還の条件として、新基地を要求するのは、「強盗が奪った物を返してやるから代わりを寄越せ」と言っているようなもの。それを、こともあろうに、ごもつともと。さらに、臆面もなく、「沖繩に寄り添って」と抜かす。

(鹿児島市 桐原浩)

核ゴミ 核のゴミをめぐる、幌延の研究期間延長、寿都・神恵内の文献調査受け入れと、こちらも慌ただしい動きでした。先の長い攻防を覚悟しつつ、より良きお百姓さんも目指そうかと思っ
ています。

(名寄市風連町 田中博 廣子)

今こそ、生命と生活を守るための政治と民主主義の再構築のために！ 二〇二〇年は、新型コロナウイルス感染症の拡大によって、この社会の脆弱性が明らかになり、貧困の増大と格差社会の広がりが顕在化した年でした。そのしわ寄せを強いられた非正規労働者をはじめとした方々の生存権・生活権が奪われるようなコロナ対策を目の当たりにして、アベ政治を継承したスガ政治も国民に寄り添う政治でないことが明らかとなりました。

また、スガ政権の強権ぶりは学術会議の任命拒否問題に始まり、アベ政治同様の権力乱用政治が踏襲され、自らのめざす社会像を「自助・共助・公助」と言い、自助努力を強調し、公共サービスの後退させ、自己責任社会へと、国民を追いやるうとしていきます。コロナ禍が収束したら、また、潜在化してしまうような「新自由主義の問題点」の克服のため、政治課題や労働運動、市民運動、平和運動課題も「わがこと」として捉えることのできる国民・仲間とともに、今の間にしっかりと繋がり、闘い続けていきたい。

一日も早くコロナ感染拡大防止を確かなものとし、県政と真摯に向き合い、南海トラフ地震など自然災害への備えをはじめ「生きやすさ・働きやすさ、暮らしの支援」を拡充させていきたい。

(高知県 坂本茂雄)

原発事故から10年 昨年はコロナ禍で世界中が混乱した一年でありましたが、大変お世話様になりました。それにしても日本の対応には許し難い事ばかりでありました。

国民の命と健康を守ろうと真剣に取り組んできたのか疑問のあるところです。今年には原発事故から10年になりますが、もう終息したかのような再稼働ありきの取り組みですが、原発のない平和な社会・後世が安心して生活できる社会である事を願いたい。

(福島県相馬市 國分富夫)